

# 文学部におけるFD活動報告

文学部FD専門委員 篠崎 榮

## はじめに

一連の大学改革の取り組みで最近の焦点の一つはファカルティ・ディベロップメント（教授団の能力開発、以後「FD」と記す）である。この概念は英国の大学に由来するもので、英国の大学入学者の急激な増加に対応するために大学教員が増員された時期に、教育経験のない研究員たちが大学教員になったが、そこで分かったことは、すぐれた研究者必ずしもすぐれた教育者にあらずという事実であった。大衆化された大学における学生に対しては、教育そのものが独立した課題になることを、英国の大学関係者たちは思い知らされたのである。

さて日本の大学でも相当数の国立大学がここ2、3年のあいだにFDに取り組むようになったが、筆者が1999年の秋に立ち上げられた全学のFD専門委員会の文学部代表委員の一人として、第1回の委員会報告を12月の教授会で行った時には、まだ学部の大半の教員にとって「FD」という概念は馴染みのないものようであった。そのため筆者は教授会で、通常の委員会報告に加えて5分間ほど「FD活動とは何か」についてレクチャーをした。その際強調したことは、FDという概念によってその能力、資質の開発が意図されているのは、「ファカルティ」という言葉が示しているとおり、個人の教員というよりチームとしての教員共同体であるということだった。というのも、筆者自身が当時は「FD」という言葉から個人の教員の意識改革とそれに伴う教育能力の向上ということしか考えていなかったからである。筆者にとってもFD専門委員として第一に学んだことは、「FD活動」の主眼が共同体としての教授団（学科や講座単位での教員チーム）の大学人としての資質全般の向上にあるということであった。

このようにFD活動は、まずは職場を同じくする教員同士のチームプレーの精神を開発し向上させるものである。大学の教員はともすれば独りだけでの仕事が多く、学生教育に関して仲間同士で率直な意見交換をしておこなったため、独善的なやり方に気づかない人、また気づかされても外圧が加わらない限りは物言わぬ学生相手にこれまでのやり方を続ける人が結構多い。学生が物言わなければ、つまらない講義は改善されないままである。昨今の大学改革でのFD活動の重視によって、大学教員は、学生を好悪の感情をもった人間としてきちんと尊重するように、そのためには教えることにもっと情熱をもって学生に対面するようにと促されていると言えるだろう。

## 1. 文学部第1回FD企画——基礎セミナー担当者による経験披瀝と話し合い——

さて、月一回の定例のFD専門委員会で、委員は学部内のFD活動の取り組みについて報告をすることになっている。報告をするためには、何か取り組みをしなければならぬ。そこで、文学部ではその取り組みのはじめとして、担当教員のあいだで悩みがよくきかれる一般教育の必修科目「基礎セミナー」の授業をめぐって企画を立てた。

第1回ということでも、とにかく基礎セミナー担当経験者からそれぞれの担当経験を話してもらい、その後質疑応答や話し合いという形式で、三人の先生たちをお願いした。企画した者としてありがたかったの

は、依頼した三先生ともにすぐに快諾してくれたことだった。6月14日（水）の5時限目の時間に、各先生の話と質疑応答をそれぞれ約15分ずつという見当で、ともかく文学部の第1回のFD企画を行なうことにした。当日参加者は11人ほどで、発表も質疑応答も堅苦しくならず、適度に同僚同士の親近感を出せる規模の人数であった。実際、各先生の個性のある基礎セミナーの授業のやり方と経験談、それに対する参加者の質問など、自発的な参加者だけに興味のある話題が続いた。

そのなかで伊藤正彦先生は4年間にわたる基礎セミナー担当経験から問題点を次のように挙げている。最近の学生たちは体験については話す、共通の文献を読んだの討論はできなくなっている。したがって、高校から大学への転換教育が目標である基礎セミナーでも議論は成り立たないので、ゼミ形式の授業での準備と報告の経験をさせることに目標を下げざるを得ないとのこと。また学生同士の自己紹介や懇親会を実施するなどして、学生が発言しやすいクラスづくりを実践している苦勞が披瀝された。伊藤先生は基礎セミナーの運営を阻む要因を、ゼミとしては多すぎる20人という人数、授業期間が15週であること（学部が異なる学生たちは互いの顔と名前が一致する頃に終了してしまう）などに求め、改善を訴えた。（もっとも筆者からみると、基礎セミナーが必修であり、このことが全国的にも熊本大学の教養教育改革を注目に値するものであるとした大きな要因であったことを考慮すると、基礎セミナーの必修制度は残したほうがいいと思うし、そうすると現在の1クラス20人でも100クラス用意しなければならない現在の体制で、その長所を生かすしかないと思われる。）

岩松久雄先生は「世の中 変ですな」というテーマで、学生たちに現代の日本社会でおかしいと思う現象を調べさせ報告と討論をさせているが、そのセミナー運営の詳細を紹介してくれた。そして学生たちには授業理念として、憲法および教育基本法に基づいて民主主義社会の形成者にふさわしい教養の修得が目的であることを説明するなど、自身の明確な教育理念に基づく基礎セミナーの授業実践が披瀝された。学生が自分の問題を決めてから報告に向けての準備段階、発表段階ときめ細かい指導の様子は参加者の多くにとって参考になったと思われる。

## 2. 文学部FD一泊研修会企画について

いくつかの大学では3年ほど前から管理職の教員が率先して、学部や全学の企画として一泊のFD研修を実施している。筆者はFD専門委員として、文学部もそのような企画を実施する時期だろうと考え、夏前にもう一人のFD専門委員会委員である中山評議員の賛同を得て、秋に文学部ではじめての一泊のFD研修企画を実施することにした。研修場所を大学から1時間以内で行ける日赤研修センター「アソシエート」（在長陽村）とした。ここにあるゆったりとした温泉と評判のよい食事がなるべく多くの教員の参加を促すのではないかと期待してのことであった。期日は学部長と両評議員が参加できるように、11月16日（金）18時から17日（土）11時半までに設定した。参加者は15名（内一日だけの参加者5名）であった。

具体的なプログラムについては、学部の教育検討委員会で協議した。FD活動の領域は、教育、研究、組織運営、社会サービスのすべてにわたるが、第1回の研修テーマは、学科、分野という教員集団での学生教育の取り組みということにした。

1日目はFD専門委員二人がそれぞれ「FDとは何か」と「文学部とFD」という主題で、各20分の話と15分の質疑応答をすることにし、その後懇親会ということにした。その話は質疑応答を引き出すためだけでなく、できるだけ懇親会の席での話題の種になるようなものというのが企画段階の趣旨であった。

「FDとは何か」という提題で、筆者はFDという概念がなぜ日本の大学では定着するのに年月がかかったのかを考えることから、日本の大学人の特殊性を問題にした。つまり、大学教員にFDを導入すること

はこれまでの大学観の変貌を要求することだが、FD概念の定着の遅れそのものが日本の大学人の保守性を示しているように思われ、筆者はそうした保守性の由来を考察して、次のような論点を提示した。

- ① 日本の大学教員の多くは、従来、社会的要請である教育を軽視して、自分を教育者としてよりも研究者として規定したがるのだが、その心理には、知的職業に携わっている人間には社会の要請など軽視して構わないとするエリート意識があったのではないか。
- ② 教育は他者との係わりで成立する仕事だが、文学部の教員になる大半の人間は対人関係よりも本と付き合うことを好むので、教育よりも研究という傾向が強いのではないか。

考えてみると、普通の企業では従業員の職能を開発したり高めたりするためにさまざまな研修を企画しているのであり、それは全体としての企業能力を高めるうえでは必須のことだという認識からであろう。その意味では、FDというようになって大学もやっと世間並みになってきたと言える。だが、かつての大学人の多くは自分たちは「世間並み」であってはならないと考えていた。その考えは高潔と独善のいずれかと結びつく意識であり、現在のように大衆化した学生たちは、高潔、独善いずれの教員にも近づきたいとは思わないだろう。（辛うじて高潔な人士のほうが、同じ傾向性をもつわずかの学生にとっては教育者たりうるかもしれないが。）大学人の多くは教育機関にしか生育歴をもっていない自らの世界の狭さを書物の世界の広大さで充分すぎるほど補えると考えてきたのだろうが、今は、必ずしもそのような考えが通用する時代ではないと思われる。

以上のように、日本の大学におけるFD活動の欠落の原因についての考察を述べた後、提題者（筆者）は論議のために次の3点を掲示した。

- ① 各教員の授業は学科、分野のカリキュラムの中に位置づけられ、教員は当該分野、学科そして学部という共同体の一員である。FD活動の前提である「共同体のメンバーである」という意識をどうしたらより多くの教員が持てるようになるか。
- ② 分野、学科、学部の各レベルで教員共同体に対応して学生の共同体が存在するのが本来であるが、文学部には学生共同体が見えるかたちであるとは言えない。そこで、今の学生にはもはや学生会を創り維持する能力はないと突き放すのではなく、学生が分野や学科レベルでの共同体を創るように教員が働きかける、その働きかけこそ我々教員の「能力開発」の一端ととらえて、文学部の活性化がはかれぬだろうか。
- ③ セメスター制については、「少数の科目を集中して2倍の密度で学習するところにセメスター制の最大の狙いがあるのであって、従来学年を通じて4単位で行っていた授業を単に2単位の科目2つに分けるのはセメスター制とは縁もゆかりもない形だけのものである」という見解があるが（財団法人大学セミナー・ハウス編『大学力を創る：FDハンドブック』29頁）、これによると「セメスター制とは縁もゆかりもない」現在の文学部の時間割の形式は適切だと言えるだろうか。

次に、もう一人のFD専門委員である中山評議員が問題提起をした。

中山先生は文学部全体の将来像をどう形成していくかという、すぐれて管理者的な発想から、広く長期的な視野から「文学部とFD」というタイトルで基調講演的な発表をされた。

まず大学を取り巻く少子化、独法化、産業界再編成とIT革命などの外的状況を述べ、文学部の置かれている学内的な状況はいつその競争力強化と自律を要求しているとして、FD動の活発化のためには、教員が全学—学部—学科—分野と続く各集団の中で自らの位置を相対化する必要があることを説いた。

次いで現代において文学部の有する固有性と使命は、人間研究を中心とした基礎学としての性格にある

として、熊大文学部の独自性をその視野のもとで考えることを説いた。また、こうした学問に携わっている教員は自分の専門学問がもつべき時代的・社会的意義を展望できることが必要だと強調した。

そして、FD活動が対象とするすべての領域に関して、次のようにその項目を列挙されたが、これらは今後の学部のFD活動の目録となるものであろう。

- (1) 教育 ①一貫性 ②接続教育 ③教養教育 ④専門教育 ⑤大学院 ⑥卒後支援
- (2) 研究 ①個人研究 ②共同研究 ③研究公開
- (3) 運営 ①組織改革 ②自己定位(帰属の重層性の自覚) ③職務分担
- (4) 評価 ①FDと評価 ②教育評価 ③研究評価(相互評価体制) ④自己評価 ⑤外部評価
- (5) 授業 ①効果(学生への感銘感化) ②形態 ③基本(読み対話し表現する)  
④課題(授業の題材) ⑤方法

言うまでもなく、各教員は日常的には上記のいくつかに係わって仕事をしているのだが、今後は学部としてこれらの多岐にわたるFD活動の領域から自覚的な取り組み対象を選びながら、学部のFD活動を行なっていくべきであろう。

2日目は、第1回研修の特定課題であった分野による学生教育の取り組みについて、4人の先生方が質疑応答をいれて一人30分～40分で報告した。

はじめは日本史分野の吉村豊雄先生が古文書実習の教育について報告をした。古文書を勉強する最近の学生たちは資料の山と取り組むパワーや気概が以前の学生に比べて減ってきているというが、そうした学生たちを引き連れたの年間10日にも及ぶ古文書実習について、生活と勉強の共同が生む教育効果、地域の人々と学生たちとの交流を中心に興味深い報告がなされた。教員もエネルギーを使う教育方法なだけに、それ相当の大きな教育成果が伝わってくる内容だった。なお、昨年あたりから2年生の中に集団行動そのものに問題があると思われる学生が現れてきたことが新たな課題になるだろうとのことであった。

2番目は、筆者の依頼に応じてゲストスピーカーとして参加してくれた甲南女子大の芦田徹郎先生が、熊大生と甲南女子大生のちがいは——本人たちの自己意識の中で「自分は〇〇大学生である」という部分が甲南女子大生は熊大生に比べてはるかに少ない——から始めて、甲南女子大教員のFDの取り組みについて話をされた。全体的に都市圏の私立女子大の教員層と熊大の教員層の意識のちがいが浮き彫りにされる話で、我々参加者は大学として熊大を相対視するのに参考になった。熊大在職中からFDが必要ないほどに講義や実習に熱心に取り組んできた芦田先生は、私立大学に移ってからはいっそう「学生教育は、大学教員がその対価を受けてなすべきサービスである」との思いを強くされている。卒業前の甲南女子大生たちの多くが高い授業料を払ってくれた親への感謝の言葉は書いても、教員への感謝は少ないという実情にふれて、大学教員は親に向かって「わたしは研究をこれだけしているので、授業にはこの程度のエネルギーしか割けません」と言えるだろうかと問いかけた。そしてその問いかけはより多く税金が投入されているという違いしかない国立大学の教員にも当てはまると指摘された。芦田先生のような教育熱心なスタッフが加わったせいか、社会学の教員で標準テキストを作成したことが、熊大文学部には見られない甲南女子大の集団的取り組みであった。

3番目は独語独文学分野の中島隆先生の報告であった。ここ数年学生の分野志望状況が順調な当分野の教育状況について興味ある報告が期待された。1997年度のカリキュラム改革の要点とその後の状況に始まり、次いで1年次でのドイツ語末履修者の積極的受け入れについて報告がなされた。彼らは集中してドイツ語を勉強するので、その姿が通常のドイツ語履修者へのいい刺激になっているという。また分野の教育

理念に基づき大学院へも学部時代に独語独文専攻でなかった学生たちを積極的に受け入れて、1997年度以降は大学院生のすべてが独語独文以外の専攻出身者であり、出身大学も全国的な範囲で分散しているという注目すべき事態が報告された。こうした大学院生の存在は学部学生にとって大きな刺激になっているという。日常的には、ドイツ語圏への留学や旅行、ドイツ語検定などの学習目標を各学生が自ら設定するように指導し、実用価値の高い言語としてのドイツ語教育にも力をいれているそうである。授業でも学生からの情報発信を重視し、発表形式の授業を多くし、WWWも利用しているとのことであった。このような学生教育の成果として、当初、大学や社会の一般的風潮になじめず、あまり口も開かなかった学生たちに表情が出てきて、多々自分の言いたいことを発言するようになるとのことであった。

最後は英語英文学分野の隈元貞広先生の報告であった。報告は分野学生へのアンケート実施、卒論指導の全員指導体制への変更から始まり、次いで近年の学生の変化に対応するため新規に設定される授業科目の説明があった。入学時点での英語力の相対的低下を補うための「接続授業」、出口に対応するための「強化授業」を新設し、従来の教職や大学院進学にとどまらずに、一般企業やマスコミ関係に就職する学生のために新聞雑誌、ガイドブック、説明書などの多様な媒体に用いられている種々のジャンルの英語を読み取る力をつけることが英語英文学分野の教育改革の柱となっている状況がよく伝えられた。当分野ではそれぞれの教員が自分の専門領域を教授する従来型の授業に加えて、近年の学生の英語を学ぶ動機の変化や志望の多様化に対応するために、教員自身の新たな領域への挑戦を要求するいくつかの授業科目を新規に設定している。当該分野教員の積極的な取り組みが伝わる報告内容であった。

以上のいずれの報告にも質問がつづき、活発な2日目であった。普段は他学科の教育上の取り組みについて、本人たちの口から聞かずに推測でもの申すところのある面が是正され、基本的理念を共有しながらも具体的な学生教育の場面では多様なやり方があることが参加者には実感されたと思われる。

総じて第1回のFD合宿研修としては、初日の懇親会から深夜におよぶ交流も盛会で、参加者のもった感想、印象から推して成功であったと言えるように思う。